

称号及び氏名 博士(言語文化学) 中 周 子

学位授与の日付 平成20年3月31日

論 文 名 拾遺和歌集の研究

論文審査委員 主査 竹下 豊
副査 乾 善彦
副査 村田右富実

論文要旨

本論文は、平安中期に成立した第三の勅撰集である『拾遺集』を中心に、その基盤となった『拾遺抄』との関係を論じ、『拾遺集』と『後拾遺集』および周辺の私家集、秀歌撰、歌合、歌学書との関わり、さらには、古今・新古今歌風をそれぞれ代表する紀貫之・藤原定家の歌作等との関わりを考察し、『古今集』から『新古今集』にいたる和歌史の一端を解明することを目的としている。

主たる研究対象とした『拾遺集』は、藤原公任撰といわれる十巻本の『拾遺抄』をもとに、花山上皇の下命によって二十巻に増補、再編纂されて成立した第三の勅撰集であることが、現在では通説となっている。しかし、『拾遺抄』の歌はすべて『拾遺集』に重出していることから、古来、両者は混同されることが多く、のみならず、数々の歌論や秀歌撰を編んだ公任の権威も相俟って、『拾遺抄』は『拾遺集』の秀歌を抄出したものであるとの見方が長らく行なわれてきた。そのため平安中期以後、『拾遺抄』が尊重される一方、『拾遺集』は軽視され続けてきた。第四番目の勅撰集である『後拾遺集』の本来の題名は古写本にあるごとく『後拾遺和歌抄』であり、『拾遺抄』を庶幾する命名であるとする説が、定家「三代集之間事」以来、最近の『後拾遺集』の解題類にまで引き継がれているのである。

また、『拾遺集』は『古今集』、『後撰集』とともに三代集として一括されることが多く、近年まで『古今集』の歌風を墨守したにすぎぬ集であるとする評価が下されていた。昭和四十年代に入り、小町谷照彦氏が「古今集に追従するものでなく、三代集の終結点として独自の達成を遂げている」（『拾遺集の本質—三代集の終結点—』〈『国語と国文学』昭和四二年一〇月号〉）と評価されて以来、ようやく『拾遺集』の独自性に照明が当てられ始めたものの、『拾遺集』の和歌史上における位

置付けについては未だ十分に研究されているとは言い難い。ことに、基盤となった『拾遺抄』との相違、後代の和歌に及ぼした影響についての研究はほとんど行われていないといっても過言ではない。

本論文では和歌史上に『拾遺集』を位置付けるべく、『拾遺集』の歌風、『拾遺抄』との編纂方針の相違、後世への影響、同時代の周辺作品を論じる四章に分ち、考察を加えた。

第一章『拾遺和歌集』の歌風では、古今歌風から変化した『拾遺集』歌風の特色を考察した。前述のごとく、『拾遺集』は長らく三代集として一括され、その歌風は『古今集』と同一と見なされてきた。確かに『拾遺集』を『古今集』と読み比べて見ると、そこに古今的発想・歌語・表現を見出すことはたやすい。しかし、歌人毎の詠風に注目して分析するならば、『古今集』以降の和歌の展開の相もまた、見出すことが出来る。そこで、**第一節『拾遺和歌集』における貫之歌風の継承**では、『古今集』『拾遺集』両集に最多入集している貫之の『拾遺集』入集歌の分析を通して、『拾遺集』は屏風歌の製作を経て『古今集』成立以降に変化展開を遂げた貫之歌風を継承していることを明らかにした。すなわち、貫之詠の影響を受けた歌を撰んでいること、貫之詠を巻頭などの重要な位置に配するなど貫之を重視していることを指摘した。**第二節『拾遺和歌集』初出歌人の詠風**では初出歌人に注目し、その詠風の分析を通して、前節で考察した貫之晩年の歌風を初出歌人達が継承していることを論じた。すなわち、『古今集』で類型化された表現技巧を払拭しつつ、平明な叙情を志向するという特色をもつのが『拾遺集』の歌風であることを論じた。**第三節『拾遺和歌集』の物名歌とその表現**では、『古今集』と『拾遺集』の物名巻を取り上げた。物名巻が『後撰集』ではなく、『拾遺集』に再び立てられたこと自体が『古今集』への回帰と見られている。しかし、両集の物名巻の構成および表現を比較分析すると両者の相違は明らかであり、その相違は『古今集』から『拾遺集』へと展開する歌風の変化の相と軌を一にすることを論じている。

第二章『拾遺抄』から『拾遺和歌集』へでは『拾遺集』が、如何なる方針によって『拾遺抄』を増補し再編纂を行ったかを考察した。従来、両者の関係については、まず『拾遺抄』が『拾遺集』の基盤であることが解明され、次いで継承面が強調されてきた。本章では『拾遺集』が『拾遺抄』を基盤としながらも独自の編纂方針を持つことを論証した。**第一節「基盤としての『拾遺抄』—歌合歌を中心に—**では歌合歌の編纂方法に注目して『拾遺集』と『拾遺抄』との継承関係を探った。歌合歌に関しては、採歌源や編集方法において、両者は同心円のごとき関係にあることを指摘した。**第二節『拾遺和歌集』と『天徳内裏歌合』**では、『拾遺集』における歌合重視の傾向について、天徳四年に開催された「内裏歌合」を中心に上げ、『拾遺集』と歌合との深い関わりを論じた。そして、歌合での勝負や判詞をも『拾遺集』は編纂に際して参考にしていたことを論証した。**第三節『拾遺和歌集』における貫之歌の増補**では、『拾遺抄』『拾遺集』ともに最多入集歌人である貫之に注目し、両集の採録方針の相違を探った。『拾遺抄』が、貫之の「秀歌」を中心に撰歌する方針であるのに対して、『拾遺集』は貫之の日常生活が窺える和歌を増補し、「歌人貫之」を描き出そうという編纂方針であることを論じた。**第四節『拾遺和歌集』における人麿歌の再編纂**では、『拾遺抄』の人麿歌が単なる歌群中の一首であるのに対し、『拾遺集』においては恋部の配列

展開の核として新たに位置付けられていることを指摘した。さらに、**第五節『拾遺和歌集』における人麿歌の増補**では『拾遺集』において増補された人麿歌が貫之歌と並置されていることを指摘し、人麿歌激増の意味は、人麿を貫之に比肩する歌仙として位置づけようとする編纂意図によることを解明した。

第三章『拾遺和歌集』の影響と享受では、後代における『拾遺集』の享受の問題について論じた。**第一節『後拾遺和歌集』仮名序と『拾遺和歌集』**では『後拾遺集』が『拾遺集』をいかに意識していたかを、その仮名序にみる『拾遺集』への言及を分析することを通して明らかにした。**第二節『後拾遺和歌集』四季部と『拾遺和歌集』**では四季部の歌題を中心に考察し、『後拾遺集』の新しさの萌芽がすでに『拾遺集』に見出せることを指摘して、『後拾遺集』が『拾遺集』を継承していることを論じた。**第三節『後拾遺和歌集』と『拾遺和歌集』—共通する歌人詠の比較—**では両集に共通する歌人詠の表現の比較分析を通して、両集の継承関係を指摘した。併せて、『後拾遺集』は『拾遺抄』を尊重し、『拾遺集』を軽視していたとの定家以来の通説に疑問を呈し、『拾遺抄』のみならず『拾遺集』をも前代勅撰集として継承する姿勢が見られることを論証した。**第四節「藤原定家の『拾遺和歌集』享受**」では、定家以前の歌学書における『拾遺集』評価の変遷を辿り、さらに定家の『拾遺集』享受を秀歌撰と実作の両面から探ることによって、『拾遺集』において増補された和歌が定家の歌風形成に深く関わっていることを論証した。

第四章『拾遺和歌集』の周辺では『拾遺集』と同時代の作品、大斎院家(選子内親王)の私家集と『枕草子』を取り上げて考察した。**第一節「大斎院サロンと和歌**」では、平安朝期に多くの文学作品を生み出した文学的土壌である女流サロンと和歌との関わり、サロンにおける和歌の有様を、大斎院家の私家集を取り上げて考察した。**第二節「大斎院家の二御集**」では、大斎院家で生み出された私家集(『大斎院前の御集』と『大斎院御集』の二御集)が、齋院に集う人々の生活と和歌を描く意図の基に編纂されており、『枕草子』にも似通う構成と内容を持っていることを論じ、散文作品の盛行の中で創出された私家集の編纂方法を分析した。従来、時期のみが異なる同内容の家集と考えられてきた大斎院家で編纂された二御集は、編集意図と方法の相違する性格の違う家集であることを論証した。**第三節『枕草子』における和歌**」では随筆の嚆矢とされる『枕草子』の中に、和歌を中心とする章段が存することに注目し、『枕草子』における和歌の役割および私家集と類似する要素について考察した。清少納言が、皇后定子サロンの人と生活を描く日記章段において、和歌を如何に効果的に用いたかの分析を通して、作品化の方法における大斎院家の私家集との共通点を探った。

本論は、以上の四章によって『拾遺集』を中心とする平安中期和歌の諸相を考察することを通して、『古今集』から『新古今集』にいたる和歌史の一端を明らかにし、和歌史の再構築を目指したものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、『古今和歌集』『後撰和歌集』に次ぐ第三の勅撰集として、寛弘三年(1006)前後に成立したとされている『拾遺和歌集』について、さまざまな角度から論じたものである。以下、四章に亘る本論文の構成に沿って、各章の要点と研究成果として評価されるべき点について具体的に述べることにしたい。

第一章「『拾遺和歌集』の歌風」は三節から成る。『古今和歌集』の歌風を墨守したにすぎぬ集であるとするこれまでの『拾遺和歌集』の一般的な評価に対し、『拾遺和歌集』の最多入集歌人である紀貫之の歌および初出歌人の歌を取り上げ、『拾遺和歌集』の歌風が『古今和歌集』のそれからいかに変化しているか、その特色を考察している。特に、貫之の入集歌を分析した結果、自らが撰者の中心であった『古今和歌集』の成立以降、屏風歌の制作期を経て変化展開を遂げた貫之が、その晩年に到達した歌風を、『拾遺和歌集』が継承していることを明らかにしている。また、『古今和歌集』で類型化された表現技巧を払拭しつつ、平明な叙情を志向していることを、主として初出歌人の詠歌を取り上げて論じ、それが『拾遺和歌集』の独自の歌風であることを説いている。これらの指摘は、従来の『拾遺和歌集』評価の修正を迫る論として、本論文のなかでも最も評価されるべきものである。

第二章「『拾遺抄』から『拾遺和歌集』へ」は五節から成る。従来、『拾遺抄』と『拾遺和歌集』の関係については、『拾遺抄』を増補して成ったのが『拾遺和歌集』であることから、『拾遺和歌集』が『拾遺抄』を継承していることが強調されてきた。これに対し、本論文では歌合歌の編纂方法に注目し、また『拾遺和歌集』における貫之および人麿の増補歌を俎上に載せ、『拾遺抄』から『拾遺和歌集』への増補、再編纂の方法を分析している。そして、その分析を通して、『拾遺和歌集』がどのような独自の編纂方針を持っていたか、その具体相を解明している。この『拾遺和歌集』編纂方針の独自性も従来の研究ではほとんど言及されることのなかったものである。

第三章「『拾遺和歌集』の影響と享受」は四節から成る。そのうち第一節～第三節は、次の第四番目の勅撰集『後拾遺和歌集』との関係を論じたものである。なかでも、『拾遺和歌集』と『後拾遺和歌集』の歌題・歌語および両勅撰集に入集している歌人の作品を具体的に比較分析することによって、『後拾遺和歌集』が前代の勅撰集として『拾遺和歌集』を重視していること、『後拾遺和歌集』の新しさの萌芽がすでに『拾遺和歌集』に見られ、『後拾遺和歌集』がそれらを継承していることなどを述べている。この論も、『後拾遺和歌集』は『拾遺抄』を尊重し、『拾遺和歌集』を軽視していたという古くからの説に対し、再考を促すものとなっている。また、第四節では、『新古今和歌集』の代表歌人である藤原定家の秀歌選と実作の両面から、定家の『拾遺和歌集』享受の様相を探り、『拾遺和歌集』において増補された和歌が定家の作風形成に影響を与えていることを論じている。従来、『拾遺和歌集』の評価が低いこともあって、『拾遺和歌集』の後世への影響について触れた先行論文はほとんどない。『拾遺和歌集』と『後拾遺和歌集』の関係については、さらにいろいろな角度から検討されるべきであり、そのことによって、『古今和歌集』から『新古今和歌集』に至る和歌史がさらに明らかになるであろう。本章はその手掛かりを与えてくれる論であることは間違いない。

第四章「『拾遺和歌集』の周辺」は四節からなる。本章はこれまでの論と違って、『拾遺和歌集』と同時代の作品である大斎院家(選子内親王)の二つの私家集と『枕草子』を取り上げて、『拾遺

和歌集』の周辺、特に平安朝の文学的土壌である女流サロンと和歌との関わり、和歌と散文との関わりを考察している。『拾遺和歌集』の時代的背景を明らかにした論として、これもまた有益な論である。

以上述べてきたように、本論文は、三代集のひとつでありながら、従来、『古今和歌集』の歌風を墨守した勅撰集としてそれほど評価されず、三代集のなかで最も研究の遅れていた『拾遺和歌集』について、多角的な視点から論じた本格的な論文であり、極めて実証的な研究である。本論文は、これまでの『拾遺和歌集』の研究を大きく進めた論が多く収められており、今後の『拾遺和歌集』研究の発展に寄与するものとして高く評価される。また、本論文の目指す『拾遺和歌集』を中心とした平安時代中期和歌の諸相の解明をさらに推し進めることによって、『古今和歌集』から『新古今和歌集』に至る和歌史がさらに明らかになり、和歌史の再構築が期待される。本論文は、その基本的な研究として、今後も大きな影響を与えていくことが予想される。よって、本研究は博士(言語文化学)の学位を授与するに値するものと判断するものである。